［論文］

芭蕉の愛でた風景～関口芭蕉庵

*小清水　裕子

Basho's beloved landscape～Sekiguchi Bashoan

Yuko　Koshimizu

キーワード：　関口芭蕉庵、幻住庵、　琵琶湖、　瀟湘八景、　西湖
Key Words：　Sekiguchi Bashoan, Genjuan, Like Biwa, eight beautiful sceneries of old Chaina, West Lake of Hangzhou

要約：「関口芭蕉庵」は芭蕉が愛でた風景がそこに展開することを理由に、芭蕉没後に門人が芭蕉庵と五月雨塚を作った。この芭蕉庵は『江戸名所図会』や広重の浮世絵でも画材となり、著名な江戸の史跡となった。そこで、なぜ芭蕉が関口の風景を愛でたかのかを明らかにしてゆく。

芭蕉が関口に滞在していた頃に従事した神田川改修工事と、水戸光圀の小石川後楽園の造営に見られる中国の景観の美意識についても指摘しながら、芭蕉の愛した近江の琵琶湖湖畔の風景が関口が通じていることを挙げ、琵琶湖湖畔の幻住庵と関口芭蕉庵とその景物の関係と、近江八景、瀟湘八景、西湖の享受についても触れる。

芭蕉の愛でた風景～関口芭蕉庵

はじめに

東京都文京区関口の「関口芭蕉庵」は芭蕉が江戸に出てきたばかりの延宝5年（1677）頃、武家として（芭蕉と名乗る以前）神田川の改修工事のために住んでいたとされるあたりで、芭蕉がこよなくこの関口の風景を愛でたことから、芭蕉の死後には弟子たちによって「芭蕉庵」が建立された。後日この芭蕉庵は『江戸名所図会』や広重の浮世絵でも画材となり、著名な「江戸の史跡」となった。

そこで、なぜ芭蕉が関口の風景を愛でたかのか。その理由を明らかにしてゆきたい。先ず、芭蕉の愛した近江の琵琶湖湖畔の風景に関口が通じていることが挙げられる。琵琶湖湖畔の風景は中国の「瀟湘八景」の影響で「近江八景」として室町以降に享受されていく。つまり芭蕉の愛でた関口の風景は、「近江八景」でもあり、近江八景の源流となる文人の好んだ「瀟湘八景」でもあることは容易に想起できる。しかしそれだけでは不足である。

本稿では「関口芭蕉庵」と「瀟湘八景」に注目し、芭蕉が改修工事に従事した「神田川」と水戸光圀が「西湖図」を意識して作庭を指示した「小石川後楽園」との関わりを明らかにしながら、芭蕉の憧れた中国文人の美意識が関口の風景に投影されていることを述べ、芭蕉の愛でた風景について述べていきたい。

図 1・関口芭蕉庵

1　関口芭蕉庵

まず、現在の関口芭蕉庵の所在地は東京都文京区関口二丁目の神田川沿いの、胸突き坂沿いの傾斜地にある。胸突き坂をはさみ、水神宮と向かい合う立地となっている。

東京都文京区教育委員会が関口芭蕉庵入り口に立てた案内板によると、

関口芭蕉庵　文京区関口 2-11-3

この地は、江戸前期の俳人松尾芭蕉が、延宝5年(1677)から延宝8年(1680)まで、神田川改修工事に参画し、「龍隠庵」と呼ばれる庵に住んだと伝えられている。後に世人は「関口芭蕉庵」と呼んだ。

享保 11 年(1726)、芭蕉の 33 回忌に当たり、芭蕉の木像を祀る芭蕉堂が建てられた。その後、去来・其角・嵐雪・丈草の像も堂に安置された。

芭蕉は、早稲田の田んぼを琵琶湖に見立て、その風光を愛したと言われている。そこで、寛延3年(1750)宗瑞・馬光らの俳人が、芭蕉の真筆「五月雨にかくれぬものや瀬田の橋」の短冊を埋めて墓とした。この墓を「さみだれ塚」と称した。塚は芭蕉堂の近くにある。

芭蕉庵の建物は、昭和 12 年(1937)3月、近火で類焼したが、同年8月再建された。しかし、昭和 20 年(1945)5月の戦災で焼失した。

敷地内には、芭蕉堂・さみだれ塚・朱楽菅江歌碑・伊藤松宇の句碑などがあり、往時をしのぶことができる。　　文京区 教育委員会

とある。天保五年～七年（1834～1836）にかけて描かれた『江戸名所図会』（図 2、図3は松濤軒斎藤秋長他著　須原屋茂兵衛ほか出版・国会図書館デジタルライブラリー版）の「芭蕉庵　五月雨塚　駒留橋　八幡宮　水神宮」は芭蕉堂がなされてから約一世紀、五月雨塚が建立されて八十年が経過するものの、江戸の人々に名所として認知された芭蕉庵の姿を知ることができる資料である。

図 2・江戸名所図会（図 3 拡大）

図3・江戸名所図会

『江戸名所図会』には、駒留橋のやや下流の小高い丘に芭蕉庵が描かれている。駒留橋をはさんで芭蕉庵と向かい合う早稲田の水田が描かれている。満々と水をたたえていれば、確かに一帯の水田が水辺の風景として広がって見えることが想像に難くない。

芭蕉が、この関口の地に滞在していた頃は、まだ「芭蕉」ではなく「桃青」と名乗っていた頃で、俳諧の宗匠としてのデビュー前となる、延宝五年（1677）の芭蕉の句に

五月雨や竜灯揚る番太郎　桃青　　江戸新道（六百番発句合）(1)

がある。解釈は

五月雨が降り続いて辺り一面海のようだなあ。その海に点々と竜灯の灯りを掲げた番小屋の番人(2)

である。この句では、やや俯瞰的に一帯を見渡す視点でもって景物が描かれている。そして雨によって、一帯は「海＝うみ」の景色に見立てる芭蕉の視座が示されている。芭蕉が関口芭蕉庵の辺りで、早稲田の遠景を海＝湖（ウミ）に見立てるのは、その景物だけではなく、五月雨、雨、と言う気象条件が重なればなお一層、早稲田を琵琶湖と見立てるに適した条件が加わるのである。

さらに、琵琶湖には「瀬田の唐橋」をはじめとする歌枕が古来からの名所となっている。琵琶湖湖畔の歌枕から、琵琶湖の風景に橋は必須のものであることが理解できる。一方、関口芭蕉庵は、やや上流に駒留橋がかかっていて、琵琶湖の景物として不可欠な橋の存在と同様の、海と橋の実景が展開する。芭蕉がこの関口芭蕉庵の地を琵琶湖湖畔の風景と見立て、そして愛でたのは実景としての類似点によるものであったことが示されている。

さて、芭蕉が江戸の関口に赴いたのは文京区教育委員会の案内板にある「神田川改修工事に参画」したことが理由であるが、芭蕉は土木工事の肉体労働者ではなく、

折々に江戸小石川の水道工事の事務に携わる。ただし手伝い程度。(3)

の労働者と考えられている。実際に芭蕉がどのような仕事に携わっていたのか具体的には明らかになってはいないものの、芭蕉は、神田川改修工事のために働いたことは確かで、その神田川の改修工事は、当時の火事に弱い江戸のインフラ整備の一環であり、そしてまた、水戸光圀の小石川後楽園の造営とも深く関わっている。

2　小石川後楽園に表れた中国の風景

2－1　瀟湘八景

東京都小石川にある「後楽園」は、岡山県の「後楽園」との混同を避けるために、「小石川後楽園」と称されている。この小石川後楽園の造営に深く関わった人物は、水戸光圀であり、小石川後楽園の造営にあたり、中国・明の亡命してきた学者、朱舜水の助けを以て、中国風の庭園がなされた。

小石川後楽園については、東京都公園協会が以下の通り説明している(4)

この地は小石川台地の先端にあり、神田上水を引入れ築庭されました。また光圀の儒学思想の影響の下に築園されており、明るく開放的な六義園と好対照をなしています。

光圀は、自身の中国趣味・儒教的思想を庭園の築造に生かすなど整備に力を注ぎ、特に隣国明の学者で日本に亡命していた朱舜水の意見を取り入れ、随所に中国の景観を配しました。「後楽園」の園名も、光圀が朱舜水に命じて選ばせたもので、宋の笵仲淹の『岳陽楼記』中「先天下之憂而憂　後天家之楽而楽」（天下の憂いに先立って憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ）から名付けたものです。これは為政者の心得を説くもので、光圀も自らの政治的信条としました。

つまり、中国の景勝が小石川後楽園に再現がされているのである。「後楽園」の名前が宋代の范仲淹『岳陽楼記』の一節から命名されていることからすれば、岳陽楼の建つ中国の湖南省の洞庭湖近辺の美しい景色「瀟湘八景」がインスパイアーされていることも容易に理解できる。

まず、岳陽楼であるが、中国最大の湖である、洞庭湖（近年、土砂の流入で面積が小さくなり第一位の面積ではなくなってしまった）の湖畔に建てられた、元々は、三国時代の呉の水軍の練兵台として築かれたものであったと伝わる楼閣である。杜甫をはじめとする中国の文人もたびたびその地を訪れ、詩を詠んでいる。

杜甫の「岳陽楼に登る」では、岳陽楼に登って洞庭湖の壮大な景色を眺めた詩人の現況によせる心境が詠まれた詩として名高い。(5)

登岳陽楼　杜甫

昔聞洞庭水　昔から洞庭湖の壮大さは噂に聞いていたが
今上岳陽樓　今、岳陽楼に登って、（その景色を眺めてみると）
呉楚東南裂　呉と楚の国はこの洞庭湖によって、東南に割かれている
乾坤日夜浮　そして万物は日夜、湖面にそのかげを映している
親朋無一字　（私は今）親類や友人からの手紙は一切無く
老病有孤舟　老いて病気がちな我が身と一艘の舟があるだけだ
戎馬關山北　今なお戦乱は関所の向こうの山の北で続いていて
憑軒涕泗流　楼上の手すりに寄りかかっていると涙がとめどなく流れる

また、李白も「洞庭に遊ぶ」を詠んでいる。李白は左遷となり、任地に赴く途中で赦免され、その際に立ち寄った洞庭湖で同じく左遷された友人と同舟し詩を詠んだ。(6)

游洞庭湖　李白

洞庭西望楚江分　洞庭湖で西方を眺めると、楚江が湖から分かれるのが見える
水盡南天不見雲　洞庭湖の尽きる水平線は雲一つ無い南天にあり
日落長沙秋色遠　日が落ち、長沙の辺り、秋の風情が遠くに見える
不知何處弔湘君　そして湘君を弔うにも、どこなのかわからない・・・

前述の杜甫も李白も唐代の詩人であり、芭蕉が好んだ詩人でもある。「おくのほそみち」では杜甫の「春望」を踏まえて「夏草や･･･」の句が編まれてることは有名で、現在の日本の中学校・高等学校の国語の教科書に芭蕉と杜甫の「春望」が掲載され続けている。

さて、「瀟湘八景」は、北宋後期、宋迪（蘇軾と同時代）が洞庭湖周辺を描いた山水画の「瀟湘八景」が元となり生まれたものである。そして以降「八景画」が流行することになる。この「八景」の流行は日本にも伝えられ、「近江八景」「金沢八景」などが名所となり文人の画材となった。そのことは「日葡辞書」にも記述が認められる。

Facqei （八景）八つの景　シナ及び日本で有名な八つの景色 (7)

として、瀟湘夜雨 、平沙落雁、煙寺晩鐘、山市晴嵐、江天暮雪、漁村夕照、洞庭秋月、遠浦帰帆の全、八景が紹介されている。

「日葡辞書」の記述にもあるとおり、日本では、まずは琵琶湖に近江八景が誕生する。近江八景については滋賀県が次のように説明している。

近江八景 （滋賀県 HP）(8)

約 500 年前の室町時代に、中国湖南省にある洞庭湖の八景にちなんで、関白近衛政家が選んだと伝えられています。浮世絵師の安藤広重の風景画により広く知られるようになりました。

とあるように、「近江八景」は石山秋月、瀬田夕照、粟津晴嵐、矢橋帰帆、三井晩鐘、唐崎夜雨、堅田落雁、比良暮雪からなり、既に芭蕉の時代には定着し、広重の浮世絵によって全国に一般に広がったものと考えられる。なお、滋賀県の大津市歴史博物館では近江八景のジオラマと映像と近江八景の浮世絵などの展示がされている。（2022 年 10 月現在）そして広重の「近江八景」の約 40 年前となる寛政 5，6 年（1793、1794）にはすでに栄松斎長喜が「近江八景」を描いており、こちらも広重と並び展示されている。下に示した図 4「近江八景全図」(9)は石山寺から近江八景を紫式部が望む姿が描かれている。（なお、石山寺は紫式部が源氏物語を執筆した場所だとして巷間に流布する場所である）広重の描いた近江八景は芭蕉よりも時代は下るものの、芭蕉の愛でたという琵琶湖の風景を知ることができるのである。

図 4　歌川広重　近江全八景図

また、この琵琶湖湖畔の地は、近江八景が広く知られる以前より、その地は既に広く知られる場所であった。天智天皇が奈良の飛鳥から遷都し近江京とし、繁栄をした場所であり、そのため古来より、歌枕の地として認識されていた。室町時代には既に成立していたとされる『謌枕名寄』(10)巻第廿二、廿三、廿四はそれぞれ近江国上、中、下、となり、巻第廿二には「近江海篇」が立てられ、琵琶湖が取り上げられている。

2－2　西湖十景

また、小石川後楽園の中には日本初となる「西湖堤」が築かれた。西湖堤とは、中国の浙江省・杭州の西湖に築かれた堤であり、宋代に詩人の蘇軾がその土木事業に官吏として関わったとされる「蘇堤」のことを一般的には「西湖堤」と言っている。小石川後楽園の西湖堤について、東京都公園協会の説明によると(11)

> 中国の西湖、蘇堤を写したもの。かつて白い蓮が植えられていた。
> 日本の庭園で最初に西湖の堤が表現されており、本園を歴史的かつ景観的に特徴付ける重要な庭園構成要素の一つ。

とし、実際に小石川後楽園内の西湖堤の案内看板には、

> 本園以降の大名庭園の「西湖の堤」の先駆けになった。

と、示されている。

図 5・小石川後楽園　西湖の堤

そもそも西湖に堤が作られたことは、西湖の開拓事業の一環であり、日本では詩人として名高い、白居易や蘇軾が官吏として関わっていたことでも知られている。白居易は 822 年から 25 年に、蘇軾は 1086 年から 1094 年にともに杭州の地方官吏として赴任している。現在、西湖にかかる堤には東西にかかる白堤と、南北にかかる蘇堤とがあり、白堤は、後人が杭州の官吏として西湖の整備に努めた白居易を讃え、白堤と名付けたとされる。また、蘇堤は、官吏

として、公共事業に力を注いで、堤の整備をした蘇軾を讃え蘇堤と名付けられている。蘇堤には現在では蘇軾の銅像が建てられている。そして、日本でも有名な二人の詩人がこの地を読んだ詩が伝えられていた。

餘杭形勝　白居易

餘杭形勝四方無　杭州のような景勝の地はどこにもないでしょう
州傍青山鯨枕湖　州は青山に沿って、県は西湖にのぞんでいます
遶郭荷花三十里　街をめぐって蓮の花が三十里も咲き
拂城松樹一千株　町中に松の木が千本もあります
夢児亭古傳名謝　夢児亭は古いけれど謝霊運の名を伝え
教妓楼新道姓蘇　教妓楼は新しくその姓は蘇小小の蘇といいます
独有使君年太老　このような西湖で長官の私一人だけが年老いて、
風光不称白髭髪　この美しい景色に白髪のあご髭が釣り合わないのが残念です

飲湖上初晴後雨　蘇軾

水光潋灩晴偏好　さざ波で湖面が日光にきらきら輝き、晴れ渡って美しい
山色空濛雨亦奇　湖畔の山々が雨に煙ているのもまた美しい
欲把西湖比西子　西湖を美人の西施にたとえるならば
淡粧濃抹總相宜　薄化粧もしっかり化粧したのもどちらも良かったのと同じように、
西湖も晴れも雨もどちらも美しいのです

このように詩人が詠んだ西湖の景色は、やがて「西湖十景」画として日本で流行することになる。「西湖十景」とは「瀟湘八景」を手本として、中国の南宋（1224～64 年）に流行する画題で、日本では狩野派が好んで画題としたものである。その西湖の十箇所の名勝は断橋残雪、平湖秋月、曲院風荷、蘇堤春暁、三潭印月、花港観魚、南屏晩鐘、雷峰夕照、柳浪聞鶯、双峰挿雲である。そして西湖十景のうちの蘇堤春暁が日本に伝わる西湖堤とされ、西湖十景の画題の周知とともに、拡散されたものと思われる。

2－3　小石川後楽園に再現された瀟湘と西湖

小石川後楽園は、その名前を『岳陽楼記』から得ていることから、中国・湖南省の洞庭湖を中心とした瀟湘八景と、中国浙江省の西湖の名勝西湖堤の再現から、西湖十景、両方を取りいれた、最上の庭園である。そしてこの庭園の造営のためには川と水が不可欠の要素となるのである。つまり神田川改修工事はそのためにも重要な工事であった。当然、芭蕉は、この小石川後楽園の造営と同時期生きていたわけであるから、小石川後楽園に再現された中国風の庭園のことは認知していたはずである。

そして延宝五年（1677）の芭蕉の作品に小石川を入れて詠んだ作品が一句存在する。

一時雨礫や降て小石川　桃青　江戸広小路

（解釈）ここは小石川。とすれば、時雨がバラバラと降りすぎたと思ったのには名にふさわしくひとしきり礫が降ったのかな

前述の「五月雨や竜灯揚る番太郎」もやはり雨であり、この小石川を詠み込んだものも雨となっており、水の風景であることには注視したい。

3　芭蕉の愛した琵琶湖湖畔

芭蕉は、晩年、琵琶湖湖畔の近江の地を特に愛した。やがては「おくのほそ道」としてまとめられる、東北・北陸への吟行に出かける、その年、元禄元年（1688）年の夏にも芭蕉は琵琶湖湖畔に滞在し、関口芭蕉庵の五月雨塚に埋められた前掲の

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

の句を詠んでいる。また、翌年、吟行から帰着した元禄二年（1689）の冬から、多くの時間を琵琶湖湖畔で過ごしている。後に遺言により芭蕉が葬られる「義仲寺」への滞在と比較すると、時間的には短い期間ではあったが、「幻住庵」で過ごしたことは芭蕉にとっては、近江八景を堪能する上でも名文『幻住庵記』をなすことでも貴重な時間であった。

図 6・幻住庵

芭蕉の過ごした幻住庵とは、文化庁の「琵琶湖大津歴史百科―幻住庵」[12]によると、

貞享 2 年（1685）、初めて大津を訪れた松尾芭蕉は、以降、大津の風光をこよなく愛し、多くの門人をもつことになります。幻住庵は、門人の一人・菅沼曲水が叔父の庵を改修し、芭蕉に提供したもので、近津尾（ちかつお）神社境内にありました。そしてこの地で、名文として有名な『幻住庵記』が生まれました――。平成 3 年に幻住庵の建物が新築、公開されています。

幻住庵は近江八景の石山寺に近い小高い場所にあった。現在、幻住庵は三代目の幻住庵となる。（幻住庵保勝会によって幻住庵芭蕉祭が開催されており、令和 4 年は 10 月 2 日に第 88 回の芭蕉祭が開催された。）この三代目の幻住庵は近津尾神社の境内をさらに登った場所に再建されているが、本来の幻住庵のあった場所にはその跡を示す石碑が近津尾神社社務所の隣に建立されている。往時も幻住庵は琵琶湖の見晴らしの良い場所に立っていたのである。つまり、近江八景を俯瞰する景観は、（やや幻住庵が琵琶湖から奥まっている為に視界はやや狭小ではあるが）広重の描いた前掲の図 4・近江八景全図に近い。

この幻住庵からの、橋のかかった水辺の景色の俯瞰－橋があって海＝湖＝水辺の景観が広がる構図は、前掲図 3・江戸名所図会の関口芭蕉庵が描かれた構図と通じるものがある。

また、瀬田の唐橋の句は雨の句であり、五月雨に潤った大地は海と見立てる芭蕉の視座から、芭蕉の俯瞰する景観は幻住庵では瀬田の唐橋が、関口芭蕉庵では駒留橋が。そして五月雨の琵琶湖と、五月雨で海と見立てる早稲田の田園が広がるのである。

そうであるならば、五月雨塚に瀬田の唐橋を詠んだ五月雨の句を埋めたことは、芭蕉を理解する門弟には非常に恣意的なものであったであろう。芭蕉の愛した琵琶湖の、近江八景としても名高い、琵琶湖の景観のランドマークとなる五月雨の瀬田の唐橋、そして、五月雨によって芭蕉の目には海と見立てる景観への視座は、関口芭蕉庵と幻住庵の一体化を物語っているのである。

さて、幻住庵は「幻住庵記」をまとめた場所として名高い。「幻住庵記」の結びに、

> 卯月の初めいとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つつじ咲き残り、山藤松にかかりて、時鳥しばしば過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、木啄のつつくともいはじなど、そぞろに興じて、魂、呉・楚東南に走り、身は瀟湘・洞庭に立つ。楽天は五臓の神を破り、老杜は痩せたり。賢愚文質の等しからざるも、いづれか幻の住みかならずやと、思ひ捨てて臥しぬ。

とある。「やがて出でじ」と思うほどに、この幻住庵は芭蕉にとっては佳い住処であった。そこは花が咲き、鳥の鳴く豊かな自然に囲まれていることと、芭蕉の尊敬する中国の詩人たちの心境の投影が叶いやすい場所であったことが示されている。

「魂、呉・楚東南に走り、身は瀟湘・洞庭に立つ」は、前出、杜甫の「登岳陽楼」の第三句「呉楚東南裂」の心境に通じている。つまり、琵琶湖の水の風景を俯瞰する視座が中国の詩人、杜甫の岳陽楼に登って洞庭湖を俯瞰するに相通じていることを表している。

また、芭蕉が句を詠むことは、「楽天は五臓の神を破り、老杜は痩せたり。」と、これもまた、中国の詩人に相通じているのである。

同じように、「おくのほそ道」の松島で芭蕉は、

> そもそも、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖を恥ぢず。

と、中国の景観美の代表の瀟湘と西湖を用いて、松島の景観の美しさを愛でている。これは、芭蕉の美的意識の中には、日本の文人だけではなく、中国の詩人や瀟湘八景図や西湖図に依拠する美的意識が存在することを示している。

まとめ

芭蕉は関口の風景を幻住庵からの近江八景の瀬田の唐橋・石山寺の近辺と見立てて愛でた。しかし関口の風景が芭蕉の好む近江の風景に似ているだけの理由で愛でていると捉えるのは不足である。水戸光圀が小石川後楽園を西湖図に見立てた庭園を造園するため、利水事業も併せて行った。その利水事業に神田川の改修工事を行ったことで、遠からず芭蕉は小石川後楽園の造営に関わった。この芭蕉の事績はかつて中国で公共のために西湖の開拓・整備をした詩人、白居易や蘇軾とその姿が重なる。神田川の水利事業は、直接的には西湖提に繋がり、その事業に関わった詩人の姿につながるのである。

また、小石川後楽園が西湖でもあり、また岳陽楼の洞庭湖でもあるならば、その少し上流部の関口は瀟湘と見立てることができる。

そして、その関口の風景は、。文人の好んだ山水の風景である瀟湘八景の実景の投影でもあるのだ。つまり関口は近江の景色に似ていることから、近江八景の元となる瀟湘八景を想起するのではなく、神田川によって繋がる小石川後楽園との関係から、直接、瀟湘と見立てるべきなのである。

さらに言を進めると、芭蕉は西湖や瀟湘の景物を歌った詩人たち、杜甫、李白、白居易、蘇軾の詩文の世界や、絵画的名勝である瀟湘八景と西湖十景をも関口の風景の一部として愛でていたのではないか。

「注」

---

(1) 本文は、井本農一　堀信夫注解（2003 年 7 月）『松尾芭蕉集』①②小学館を元に作成しました。
(2) 解釈は、堀切実　田中喜信　佐藤勝明編（2014 年 10 月）『諸注評釈新芭蕉俳句大成』明治書院を元に作成しました。
(3) 久冨哲雄「松尾芭蕉略年譜」（2003 年 7 月）『松尾芭蕉集①』小学館
(4) 東京都公園協会 HP「小石川後楽園」（https://www.tokyo-park.or.jp/park/format/about030.html）
(5) 漢詩の本文・解釈は吉崎一衛『漢詩の旅』（2006 年 7 月）明治書院を元に作成しました。
(6) 注（5）に同じ
(7) 土井忠生ほか編訳『邦訳日葡辞書』（1995 年 11 月）岩波書店
(8) 「近江八景」滋賀県 HP（https://www.pref.shiga.lg.jp/kengai/interview/22105.html）
(9) ウィスコンシン大学マディソン校所蔵「Ishiyama Temple, from the series Eight Views of Omi Province」（1868-1925）https://data.ukiyo-e.org/chazen/images/4b5d8240b568af1706a08431aad400f3.jpg

(10) 渋谷虎雄『校本謌枕名寄』(1977 年 3 月)おうふう社
(11) 東京都公園協会 HP「西湖の堤」(https://www.tokyo-park.or.jp/park/format/view030.html)
(12) 文化庁 HP(https://rekishihyakka.jp/culturalheritages/146/)

「参考文献」

目加田誠『新釈漢文大系 19　唐詩選』(1964)明治書院
上海辞書出版社・鈴木博訳『中国名勝旧跡事典』(1969)ペリカン社
大津市歴史博物館『近江八景』(2010)大津市歴史博物館図録
出光美術館『名勝八景』(2019)出光美術館図録

＊小清水　裕子　　秋草学園短期大学　文化表現学科　非常勤講師